

氏 名	いい だ たか ふみ 飯 田 剛 史
学位(専攻分野)	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	論 文 博 第 439 号
学位授与の日付	平 成 14 年 11 月 25 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 2 項 該 当
学位論文題目	在日コリアンの宗教と祭り——民族と宗教の社会学

論文調査委員 (主 査)
教 授 寶 月 誠 教 授 松 田 素 二 教 授 石 原 潤

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、在日コリアンの諸宗教および祭りに関する論者の社会学的調査研究を集成、総合するものである。在日コリアンの宗教活動として、儒教的先祖祭祀、巫俗・民俗宗教、仏教、建墓、キリスト教、日本宗教への参加、民族祭の形成などがあり、これらを在日コリアン社会のなかで多彩な文化機能を担うものとしてとらえるとともに、在日コリアンの自己組織化過程、いいかえれば主体的な文化形成過程を考察する。

序章では、研究の過程と方法が述べられる。1981年の生駒山系宗教共同調査（宗教社会学の会）が発端となって「朝鮮寺」とそこでの儀礼の研究を始め、88年度には大阪市生野区をフィールドとして、在日宗教活動の全貌をとらえる集中調査を試み、引き続き、方法的模索を行いながら、光山金氏親族会、キリスト教会、民族祭などの調査を実施した経過が述べられる。次にこれまでの在日コリアン研究にみられた政治主義アプローチに対し、それらが在日コリアンを政治状況のなかの受動的被害者として一面的にとらえる傾向が強かったと批判し、人間および集団をめぐる個別の社会状況の把握に基づきその主体的行動の軌跡を明らかにすべきことを論じる。新たなアプローチとして、構造一機能分析と自己組織性論の相補的接合が試みられる。すなわち、在日コリアンを日本の社会構造のサブ・グループとして位置付け、さらに在日ネットワークのうえに成り立つ諸宗教活動を、社会機能の面から相互に関連させて捉え、いっぽう在日の人々の主体的・創造的な行動軌跡を諸宗教活動において確証するという方法が提示される。

第1章は、全体の総論にあたる。まず、1980—90年代在日社会の構造特質と変動が分析される。在日の社会構造は、経済面では就職差別のためいくつかの職種の自営業に特化しており、政治的には南北分断の影響で共通目標を設定しえず、結合面ではフォーマル組織構造が弱い反面、地縁・血縁のネットワーク結合の比重が大きく、文化面では「同化」と「民族」の再自覚化の間でアイデンティティが多岐化している。この時期、在日コリアンは、経済的生活基盤を確立したうえで、差別撤廃の権利要求と民族アイデンティティの再自覚に基づく多様な文化活動を展開させつつあることが指摘される。

調査の主たるフィールドである大阪市生野区の在日社会は、7割以上が韓国済州島出身者ないしその子孫からなる濃密な地縁・血縁のネットワークに基礎をおく社会であり、その上により広範囲の島単位の諸団体、同族、宗教などの任意的集団が集積している。つぎに、諸宗教の概要が紹介され、結合型と文化機能の二軸による表のなかに諸宗教の連関が提示される。すなわち、結合型としてまず、「ネットワーク型」があげられ、血縁・地縁関係を基礎とする儒礼、巫俗その他民俗宗教活動がこれに含まれる。次に「フォーマル組織型」として、キリスト教会と日本の新宗教活動があげられる。第3の「ネットワーク型」は、民族文化祭などにみられ、新たな目標に向かって自発的なネットワークが祭りのたびに形成される。文化機能面においては、まず日本文化への「同化」志向、次に原初的「民族」文化保持の志向、第3に「在日」としての固有の生き方への志向、という3つの志向性が設定される。それぞれ、日本の宗教への関与、韓国の伝統的宗教活動、そして大韓基督教会の運動、民族祭などを対応させることができる。このようにみえてくると、在日コリアンの諸宗教は、在日社会全体の文化的・社会的統合といった機能はもたず、むしろ宗教ごとに分節化したグループを抱え、人々の多様な生き方に相即しつつ、それぞれ異なる価値志向に対応したそれを創出しているといえる。

第2章は、1980年代前半の共同調査で見出された63の「朝鮮寺」を概説する。これは戦後、生駒山系に形成された、韓国巫俗と仏教、日本の修験道などが混交した独自のタイプの「寺」の群である。そこでは、主婦が依頼主となって済州島出身のシンバン（霊能者）が行う「クツ」と呼ばれる巫俗儀礼が行われる。3日から1週間のクツがしばしば行われ、10日かかるものもまれにある。生活上の不幸は、執着をこの世に残す死者霊の障りによって生じ、クツによって霊を呼び降ろして供養し天国へ送ることによって、不幸や悩みが解消すると信じられている。

第3章は、朝鮮寺の巫俗儀礼のなかで、とくに死者霊救済のために行われる十王祭（シワンマジ）のモノグラフィーである。ある高齢の女性が、6年前亡くなった夫の葬儀の際に子供たちの反対でクツを行えなかったため、その亡霊に悩まされるようになり、改めてクツをシンバンに依頼したものである。3日間にわたって、亡父と併せて三代にわたる13柱の死者霊を呼び降ろし、地獄の十王の審判を経て天国に送る儀礼が行われた。これは依頼主にとってこれまでの家族史を総括し、死者とともに抱いて来た「恨」（ハン：心のなかに鬱積する悲哀）を解放する意味をもつものであった。

第4章では、在日シンバンによって1988年に創立された「大興寺」の、多様な要素からなる開創儀礼とそこに集まる人々のネットワーク関係が報告される。シンバンが「寺」を創るのは、日本においてのみ可能となった新しい事件である。7日間にわたる一連の儀礼には、道教的な土地神拝み、仏教的な落慶法要、巫俗的な新築祝賀および住職となる男性シンバンの厄払いおよびその妻の霊能者としてのイニシエーションが含まれる。約150名からなる参集者は、済州島の出身村を中核とする信者グループ、同業宗教者グループ、家族・親戚グループおよび数名の日本人からなり、シンバンをめぐる包括的な社会的ネットワークを示すものとなっている。

第5章は、生野区を中心とする街なかにある38の「寺」の事例報告である。韓国仏教系、朝鮮総連系、日本の山岳修験系、小新宗教系、韓国からの出稼ぎ祈禱師系など多様な実態が、それぞれの創設者のプロフィールとともに記録されている。在日仏教寺院のひとつの特徴は、日本仏教にならって信者の遺骨預かりや霊園経営など先祖供養の比重を高めている点であり、儀礼と巫俗の二元的伝統の間に形成された新たな先祖祭祀の形成を示している。

第6章は、90年代末の生駒山と六甲山麓の70の寺を報告し、その変遷を分析する。1985年時の記録で76あった「山の寺」は99年時では61寺に減少し、元の住職が現存している寺は18寺で、他は人が替わっている。また27寺には住職がいない。このように山にある朝鮮寺は急速な衰退状況にあるが、韓国から来た僧が従来寺に就任として入ったり新寺を創立するなど新たな動きも見出される。

第7章では、チェサ（儒教式先祖祭祀）の事例と在日の墓地、霊園の諸形態が報告される。在日コリアンの伝統的宗教文化は、朝鮮時代のそれを受け継いで、儒教式祖先祭祀（チェサ）とシャーマニクな巫俗儀礼（クツ）の2重原理によって構成されている。チェサは同一父系の親戚ネットワーク再形成の場となり、次世代に伝統文化を伝える場ともなっている。墓については、在日一世たちは郷里に設けることを望んだが、現実には多くの遺骨は街なかの寺に預けられた。60年代から日本に墓を設ける人が現れ、70年代以降、郊外に在日向きに多く霊園が設けられた。建墓は、日本定住の最終的選択を示す行為である。墓の形態は日本のそれと共通しているが、墓碑文の表現は在日としての生き方を表明するエスニックな文化領域を構成している。

第8章では、共同霊園をもつ在日光山金氏親族会の活動概要と会員への共同アンケート調査の分析結果が示される。光山金氏は新羅時代の王子興光（フンガン）を祖とする韓国の名族であり、同親族会は主として大阪に住む済州島出身者の中から149世帯が参加して構成されている。親族会共同霊園は1960年に設立され、約200の区画のうち半数に墓石が立てられている。9月の合同慰霊祭は会の最大の行事である。各家は自家の墓参を行うとともに共通の祖先、先人を偲ぶ行事に参加することによって、家族・親戚の範囲を越えた同一家門と民族のアイデンティティを次世代に伝えることになる。アンケート調査は、66項目にわたり親族会活動、宗教行動、本国との関係、生活状況などについて問うている。半数以上が自営業者であり、堅実な生活を打ち立てているが、生活と文化の面でなお変転多い状況にあることが示される。

第9章では、親族会の指導者で在日民族教育に献身する人物のライフヒストリーが、在日社会における「儒教的知識人」の役割の観点から辿られ考察される。

第10章では、日本宗教と在日コリアンの多様な関わりが、大阪市生野区をフィールドとして述べられる。民俗宗教を担う在日の霊能者たちは、戦後、生駒山の数多い修験系滝行場を自らの「寺」につくり変えてきた。生駒山系の非権威的で雑居

的な宗教的特性が、在日の民俗宗教と日本のそれとの混交の触媒となってきた。

日本仏教寺院のいくつかは、在日の葬儀を多く扱い在日用の遺骨安置室をもっている。在日は一般に寺の檀家になることはなく、葬儀や遺骨預けのみの関わりに限定されている。神社については、生野区では在日住民の参詣も少なくなく、祭礼にも参加する。氏子会などの中核役員層は古くからの日本人住人で占められているが、近年、神社維持にとって在日の参加と寄付の比重は大きくなってきている。地元の神社以外にも、在日住民はご利益や観光で有名な神社、寺に参詣している。新宗教に入信する在日信者は少なくない。創価学会には、地域の約10分の1の在日世帯が加入しているとの関係者の証言がある。これは在日が参加する宗教教団としては最大組織であると推定される。力強い現世重視の教えが、在日の人々に支持され力を与えている。天理教は、生野区内に140名の信者があり、そのうち80名は戦前に朝鮮人によって創立された一つの分教会に集中している。信仰活動において、朝鮮・韓国の文化要素はほとんどみられない。しかし教会員全員が、古くからの在日信者であることにより、小さな在日組織がここで保持されているといえる。一般に宗教教団内では「平等」が説かれる。しかしこれは韓国人・朝鮮人も日本人と区別しないという意味であり、在日の歴史的条件や民族的、文化的特質は顧慮されない傾向があり、この状況では文化的「同化」が促進されると考えられる。

第11章では、主要な在日キリスト教会の運動と現状が分析される。なお在日社会のキリスト教人口は約1%である。在日大韓基督教会総会は、代表的なプロテスタント教会組織であり、約5000名のメンバー構成は、戦前来日の一世とその後続世代、70年代までの戦後来日者がそれぞれ約4分の1、そして70年代以降のニューカマー層が約半数を占める。この団体はフォーマルな組織形態を保ち、教会組織とクリスチャン家族のネットワークとが重層している。この団体は、「寄留の民の神学」を掲げ、積極的な人権運動、反差別運動を展開してきた。ことに80年代には外国人登録証への指紋押捺反対運動を主導し、日本の世論の支持を得て撤廃の法改正を実現させた。しかし教会内には運動に批判的な多くの牧師・信者があり、彼らは運動推進の「社会派」に対して「福音派」と呼ばれる。ただ両派は相容れない関係ではなくむしろ相補関係にあると見るべきである。すなわち先鋭な社会派の運動を、保守的な多数派が躊躇しつつ支えてきたのである。純福音系キリスト教会は、韓国において急速に成長してきたグループであり、現世的幸福を重視し感情面に強く訴える。日本にも複数の教会がつくられ、信者の多くは80年代以降、韓国から「水商売」の出稼ぎにきた女性たちである。彼女たちは、職業的罪責感を抱いており、許しの説教と涙の祈りによってカタルシスを得るのである。

最後の第12章では、在日コリアンの3つの祭りが報告され、民族文化運動の自己組織化過程として分析される。1983年に創始された「生野民族文化祭」は、韓国の農業やマダン劇などを、公立学校の校庭を借りて行う。この祭りは、各地の在日の若者たちに影響を与え、10余りの地域で、それぞれ特色をもちながら共通した形式の「祭り」が行われるようになった。留意すべきは、ここでの「民族文化」は、70—80年代に韓国で「伝統民族文化」として再創造されたものが選択されていることである。「ワン・コリア・フェスティバル」は、在日の著名なミュージシャンやアーティストに参加を求め、日本、韓国、北朝鮮ときにはアメリカのグループも加わって大きな野外ステージで行われる。目標は、南北分断状況の中で文化による連帯・統一を進めようとするものである。「四天王寺ワッソ」は、古代日本に朝鮮から多くの人々が来住して高度な文化を伝えたことを、2000名を越える街頭パレードと四天王寺における聖徳太子による出迎えの儀式によって表現する。大阪とアジアとの交流の歴史を振り返り未来を展望するイベントとして、大阪商工会議所、同府市教育委員会、外務省などが協賛団体に加わっている。

これら祭りの共通テーマは「民族」であり、「民族」は「聖」なる特性を付与された機微的実在として表現され経験される。これらの祭りは、1980年代にはじめて日本の公の場で始められた。そして10数年を経て、現代日本の新しい祭りとして認知されるようになってきたが、成立基盤は不安定で今日も流動的な状況にある。

以上でみたように、本論文は、戦後、在日コリアンは生活形成とともに固有の宗教文化を主体的に形成してきたことを明らかにし、今後、日本の文化領域においても「創造的少数者」として独自の役割を果たしうることを展望し、日本における多民族「共生」の実現のためには、日本人による在日の文化創造への認識と積極的な受けとめが必要であると論じている。

論文審査の結果の要旨

在日コリアンの歴史や政治的状况についての研究は少なくないが、宗教や祭りに関する包括的な実証的研究は乏しい。本

論文はこの領域での最初の体系的な研究である。論者は生駒山の未知の朝鮮寺をひとつひとつ探索し、在日コリアンの多く住む大阪の生野区に住み込んでその地域でのさまざまな宗教活動を丹念に観察し、さらに済州島を訪れそこで行なわれている巫俗儀礼（クッ）や儒教式祖先祭祀（チェサ）と在日社会のそれらとの違いを調査し、さらに在日コリアンの親族会の聞き取り調査や、民族宗教以外の日本宗教や基督教や民族祭などについて20年近く地道な調査を積み重ねてきた。論者が取り上げた在日コリアンの宗教活動は、巫俗・民族宗教、儒教式祖先祭祀をはじめ、建墓、在日韓国仏教、キリスト教（在日大韓基督教会・純福音系キリスト教会）、日本宗教（創価学会・天理教・日本仏教・修験道）への参加、民族祭の形成などに及ぶ。これらは現代の在日コリアン社会に見出される宗教活動の大半を視野に収めており、さらにその社会的背景を掘り起こした点で貴重な研究である。論者が宗教活動に注目するのは、在日コリアン社会では可視的な文化領域（言語・衣類・住）において日本の生活様式との同化・平準化が進んでいるのに対して、宗教は生活文化の中で比較的、在日固有の形態を保有し、在日生活に伴うストレスやエスニック・アイデンティティの危機への対応、あるいは親族の連帯維持や在日民族文化の形成などにおいて一定の機能を果たしているという認識によるものである。

論者が最初に手がけたのは人々の目に触れにくい民俗宗教である。論者の調査によれば生駒山系には63カ寺ほどの朝鮮寺が見出されるが、その大多數の寺では巫俗儀礼が行われている。論者は寺のひとつ神徳院で行われた十王祭（シワンマジ）とよばれる巫俗儀礼を参与観察し、3日間にわたる儀礼がどのように執り行われたのかや、儀礼の願主や儀礼を執り行うシンバン（霊的職能者）や参加者の経歴、儀礼の目的を明らかにしている。この儀式が済州島シャーマニズムの単なる再現ではなくて、在日コリアンのおかれた歴史的状況、済州人のネットワーク、個別状況としての家族史上の危機など複数の層によって織りなされた事象であると論じている。さらに、朝鮮寺・大興寺の7日間に及ぶ開創儀礼の観察によって、朝鮮寺を支える社会的ネットワークや儀礼の変容を明らかにしている。儀礼の参加者は同郷や親族関係者が主であるが、済州島ほど村単位の閉鎖的なものでないことや、シンバンと信者の関係も固定的なものではなくて流動的であることや、在日社会では巫俗儀礼への男性の参加や依頼も見られ、チェサとクッに引かれた男女間の境界線が弱くなっている実態を明らかにした点は興味深い。

在日コリアンの宗教活動は山の寺だけでなく生野をはじめとする街の寺で営まれている。これまでまとまった資料のなかった韓国仏教系寺院・総連系寺院・民族宗教系寺院・独立系寺院・日本仏教系寺院など多様な街の寺院の所在地を掘り起こし、そこで行われている宗教活動の実態を明らかにした点は、今後の研究の基盤となる貴重な成果である。在日の世代交代が進み、日本定住が自明の生活方針となってくると死者儀礼が重要な位置を占めるようになるが、生野の在日の典型的な葬式は、まず寺で行い次に家で儒教式の拝礼をし、最後にシンバンをよんで霊おろしのクッをするという三重構造で行われる。韓国仏教系寺院も本来は行わない葬儀や供養を生野では行うようになり、さらにどこに墓を立てるのが在日の関心事になる。光山金氏の親族組織による大規模な霊園建設のケース・スタディーを通じて、論者は霊園建設が在日コリアンの墓の需要に応えるだけでなく、都市化・異郷状況における同門の再組織化に役に立ち、さらに儀礼を通じて民族文化の再認識の機会を与えていることを明らかにしている。

しかし、在日コリアンの宗教活動は伝統の継承や民族文化の再認識にとどまるものではなくて、もっと多様な契機をはらんでいる。在日コリアンの日本の伝統的仏教寺院とのかかわりは葬式と遺骨預けに限定される傾向があるが、天理教や創価学会の会員も多い。論者は生野区の在日コリアンの10分の1が創価学会の会員であると推計している。その多さは民族性にとらわれず現世利益をアピールした学会の運動方針が、零細自営業が多く、平等を求める在日の関心と一致したためであるとみる。在日大韓基督教会は逆に民族性や人権を強力にアピールする。宣教方針は「寄留の民の神学」にあり、苦難の在日の民を救済するために政治運動と連動しやすい。しかし、それに違和感をいだく福音派も存在する。両者は緊張をはらみつつも組織の求心性を保っているのは、長老制の原理と「苦難の民」という集合的自己認識であることを、教会の指導者とのインタビューを通じて明らかにしている。さらに宗教活動は生野民族祭やワン・コリア・フェスティバルや四天王寺ワツソなど祭りにもみることができる。これら民族祭は日本の祭りと異なっており、一つの民族・文化を「聖なるもの」として象徴する集合的活動であり、同時に共生や新たな在日文化の創造を目指している。それらは氏子などの地域組織ではなくてボランティアのネットワークを支持基盤にしているために、参加者の広がりには得られても連帯感は一時的なものになりやすいと、論者はみる。

以上のように本論文は、在日コリアンのさまざまな宗教活動の諸相と現実を詳細に明らかにした点で高く評価される。だが、望むべき点もないわけではない。宗教活動の意義を理論的に整理するために論者は構造・機能主義や自己組織性の理論を活用しているが、豊かな経験的事実を把握するにはもっと多様な理論も考慮することでよりの確に説明される箇所も少なくない。また、民族的アイデンティティと親族的アイデンティティの関連や諸宗教の選択原理についての考察に乏しいことも惜しまれる。しかし、こうした点は本論文の価値を大きく損なうものではなく、むしろ論者の今後の研究に期待すべきところである。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお、2002年9月30日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について試問した結果、合格と認めた。